MAINICHI
毎日新聞
6月1日(水)
2022年(令和4年)
発行所:東京都千代田区一ツ橋 1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社

「もう水に流さない」

2022年6月1日、「LIFULL TABLE」(東京都千代田区麹町)で「#地球塾2050」が開かれた。私たちはWOTA株式会社CEO、前田瑶介氏に、現在の水問題とその解決策などについてお話を伺うことができた。現在、日本を含め世界中が深刻な水不足に陥っている。だが、これに対して実感がわかない人も多いのではなかろうか。しかしながら、2030年には世界人口の約40%が水不足になるだろうと推測されている。このような状況を打破するために私たちができることは何だろうか。

(中川玲菜)

水輸入国 日本

2000㍑。この数字は牛丼1杯を作るのに必要な水の量。また、日本は多くの水を外国から輸入している。なぜだろうか。人が使う水の多くは、植物や家畜などの食料を作るために使われる。そして、日本の食料自給率は約30%ととても低く、大概の食料を輸入に頼っている。日本のスーパーに並ぶ商品の多くは外国産なのである。外国産の食料は、その国の水を使って育てられている。そのため、日本は水を外国から輸入していると言えるのだ。

(阿部希乃花)

前田氏の原点

前田氏はなぜこんなにも環境問題に積極的に取り組んでいるのか。

さかのぼること約15年前、中学生の時のアメリカ訪問である。そのアメリカで言われたことは、「環境問題はもはや全人類の課題だ。だから環境問題について取り組めば、言葉は通じなくても色々な人と仲間になれる」。

もともと生物学が好きだった前田氏はこの言葉を受け今、環境問題について取り組んでいるのだ。

(大石真妃)

「遠い水」から「近い水」へ

日本で今起こっている水問題は何だろう。今は、上下水道が通り、蛇口をひねれば水が出てくる。そのとき、どこからその水が流れてきたか考えたことはあるだろうか。私たちにはそれが一目で分からない。そう、「遠い水」、見えない水が流れているのだ。今後、日本では人口が減少し、無居住地域が増加するだろう。そうなったとき、今の大規模な水道システムを支えていくことは可能だろうか。「近い水」、つまり、降った雨や霧を集めて保水し、小規模なシステムで使った水を循環させていくことが必要だと前田氏は述べる。今後は水道ではなく、「みずみち」を考えていくことこそ大切だ。

(神岡優夏)

水の在り方と伝統

前田氏は清潔な水を提供するうえで最も困難な点について「世界には様々な水の在り方がある。それぞれに合った形として提供していくのが最も大変かつ大事な事だ」と語った。

では、私たちにできる事は何か。「水の仕組みを理解し、自然そして水に関わる人に感謝して水をおいしく飲む事で、間接的ではあるが水を守れる。水は共有するもの、かつ時代に合わせてデザインされるものだという伝統を、私たちはこれからも守っていかなくてはならない」と主張した。

(川瀬史佳)

WOTAとは

「小型×高再成率×飲用可」を実現した製品を世界で初めて開発した会社だ。その製品の安全性はどれくらいか。細菌やウイルスを、なんと驚異の99・9999%以上で除去するのだ。一見嘘のように見える数字だが、実際に2人分の水で100人分のシャワーが可能なのだ。またWOTAは「小規模分散型水循環システム」にも取り組んでいる。これは現在の日本の中心となっている「大規模集中型システム」とは違い、短期間で設置が可能で、災害にも強いのだ。日本に適したシステムだと言えそうだ。

(三木悠生)